

寒^{かん}夜^やの^の即^{そく}事^じ

寂^{じやく}室^{しつ}元^{げん}光^{こう}

風^{かぜ}は^は寒^{かん}林^{りん}を^を攪^かと^と霜^{そう}月^{げつ}明^{あきら}
かなり

客^{かく}来^{きた}て^て清^{せい}話^わし^し三^{さん}更^{こう}を^を過^す
ど

炉^ろ辺^{へん}に^に筋^{しん}を^を閣^{かく}ぞ^ぞ芋^{いも}を^を煨^やく^くも^も忘^{わす}
れ

静^{しず}聴^かは^は窓^{まど}を^を敲^{たた}く^く葉^は雨^うの^の声^{こゑ}

【作者】寂室元光(一二九〇～一三六七年)・鎌倉時代後期から南北朝時代にかけての臨濟宗の僧。美作高田の出身。俗姓は藤原氏。諱は元光。

道号は初め鉄船と号したがのちに寂室と称する。近江守護六角氏頼の帰依を得て、永源寺の開山となった。師・中峰の隠遁的な禪を受け継ぎ、世俗から離れ、生涯黒衣の平僧として過した。時の天皇や室町幕府から京都天龍寺・鎌倉建長寺などへ拜請されたが、受けることなく永源寺に隠棲した。詩・偈・墨跡は特にすぐれ、重要文化財に指定されている。

【語釈】*即事…その場で直ぐに感じたものを詩にすること。 *三更…五更の一つ。今のおよそ午後十一時から午前一時。子の刻に当たる。

【通釈】冬枯れの林を風が吹き霜が降りて月光が冴える寒い夜、来客でつい話し込んで零時を過ぎてしまった。

炉辺に火箸を置いて芋を焼くのも忘れ、耳を澄ませば落ち葉の音が雨のように聞こえる